

初期シェーラー哲学の基本的構造

平 野 真 弓

はじめに

シェーラーの哲学全体系を一貫して流れている中心テーマは、「人間とは何か」という問いかけである。この問いを解明するために、シェーラーは近代諸科学の成果を取り入れ、各分野から様々のアプローチを試みているが、そのなかでも、問題解明の方向づけにおいて最も中核的な意義をもつものとして、いわゆるシェーラー倫理学の確立が挙げられるであろう。シェーラーの主著である『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik）は、倫理学の分野において、カント倫理学以来の画期的な業績として評価されている。カントの形式主義倫理学に対し、シェーラーは実質的価値倫理学を提唱することによって、人間存在の本質を、理性や悟性という立場からのみならず、情緒的側面からも追求しようとする姿勢を明らかにしたのであった。

シェーラーの思想の発展段階を眺めるとき、実質的価値倫理学の確立は、シェーラー自身にとっても、一つの大きな転回点となっている。フッサールとの出会いが、シェーラーに現象学への道を歩ませることになり、現象学という方法的基盤を与えられたシェーラーが独自の思索を大きく展開させた最初の大著が上記の著作であったからである。これ以後、シェーラーの哲学はめざましい進展をみせていくのであるが、それでは、フッサールと出会う以前のシェーラーの哲学とは如何なるものであったのだろうか。

フッサールとの出会い以前において、すでにシェーラーは、その哲学的思索の中で、「倫理的原理」の問題を中心に論じ、独自の哲学原理、独自の方法論を確立しようと模索していた。たしかにフッサールの現象学との出会いが、シェーラーの思想を大きく発展させたことは明らかであるが、そこに至るまでの、シェーラーの思想的模索期において、何が準備されていたのか、そもそも彼の哲学の出発点はどこにあったのか、これらの点について検討せずにシェーラーの哲学を論ずることはできないと考えられるのである。

以下、フッサールとの出会い以前のシェーラー哲学を、シェーラーの思想発展における

第一段階とみなすこととし、そこで彼をとらえた哲学的問題およびその問題解決に対するシェーラーの基本的立場を概観する。シェーラーの初期の哲学の基本的構造がいかなるものであったのか、そして、初期の思索が、以後の彼の哲学的探究といかなる関連にあり、いかなる影響を与えたのか、ということについて考察することが小論の目的である。

尚、小論においては、シェーラーの初期の著作の中から、彼の第一論文である学位論文『論理的原理と倫理的原理との関係確定への寄与』(Beiträge zur Feststellung der Beziehungen zwischen den logischen und ethischen Prinzipien)¹⁾、並びに、『カントと近代文化』(I. Kant und die moderne Kultur)²⁾ という論文を中心に上げ、そこで展開されるシェーラーの思想史観を素描していくことにより、彼の哲学の出発点および、その歴史的位置づけを明確なものとし、彼の以後の哲学全体系の基礎となるべき考え方の端緒をそこに見出していくものとする。

1. 論理と倫理 —その歴史的考察—

シェーラーの初期の論文集を概観してみると、シェーラーの哲学的関心が、その当初から倫理学に向かっていたことがうかがえる。それは、シェーラーの学位論文において、彼がその冒頭で自ら提起している問題の内容からも明らかである。それはすなわち、「今日の哲学的学問の営みの中での大きな問題点は、論理学 (Logik), 倫理学 (Ethik), 美学 (Ästhetik) という三つの規範学 (Normwissenschaft) が、それぞれ分離した活動をしており、それら相互の関係をさらに詳細に考察しようとする研究がなされていないように考えられる」(I.S. 13)³⁾ ということである。これは、心理学の著しい発達によって、人間の魂、心的諸能力が細かく解体・分析された結果、「人間の魂 (die menschliche Seele) の統一的な諸能力が分離」(I.S. 12) してしまい、「有機的に組織されていた魂が、単なる心的な現象の総和」(I.S. 12) としてみなされるようになったことに対するシェーラーの危機の念のあらわれであるとも考えられる。三つの規範学ともに、それぞれ、各分野において個別的に研究成果が挙げられ、それぞれに充実されているにもかかわらず、個々の規範学の間の関係を確定するという作業がなおざりにされてきた結果、「人間の魂は、それぞれの学問の規範に誠実に順応しようとして、三人の支配者によって同時に対立する指示を与えられる召使い」(I.S. 12) のようになってしまうのである。三つの規範がそれぞれに人間の魂に対して諸々の要求をする結果、一個の人間の魂の中でそれらの要求は矛盾する可能性があるのではないか。また、人間の魂そのものの構造がそれらの要求を受け入れた結果、破綻をきたすことがありうるのではないか。これらの点が、シェーラーにとっては最も大きな問題であるように思われるのである。

「論理学、倫理学、美学の三つの規範学を基盤とする、いわゆる真(das Wahre)・善(das Gute)・美(das Schöne)の三つの理想」(I.S. 14)を相互に評価することのできる四番目の価値原理たる統一原理が見出されうるのか、三つの理想とは異なる新たな規範学が形成されねばならないのか、そもそも「人間の魂には決定的な分裂があり、この分裂の克服など不可能である」(I.S. 14)のか、このような諸々の問題点をふまえつつ、シェーラーは、人間の魂の中に、これら三つの理想を調和的に統一しうる能力が教育を通して獲得されるのではないか、というその可能性を追求しようと試みていると考えられるのである。

シェーラーは、三つの規範学の関係確定にあたり、その予備的作業として、先ず論理学と倫理学との関係を取り上げており、論理学と美学、あるいは倫理学と美学との関係に関する考察は後の課題としている。結局、この二つの課題はその構想どうりには実行されず、論理と倫理との関りについてのみ論及されることになったが、このことは却って、シェーラーが「倫理的な事象を哲学的に基礎づけるに足る原理」を求めることに対して、いかに関心が強かったかということを示す⁴⁾ものであるとすることができるであろう。

シェーラーは、論理と倫理、換言すれば、理論と実践、あるいは真と善との統一原理たる哲学原理を探究しようとしているのであるが、彼は先ず、この思索をギリシア以来の哲学史の流れの中に置くことにより、論理と倫理との関係のあり方を歴史的に考察し、同時に、自己の思索を思想史の流れの中に位置づけようと試みている⁵⁾。

論理と倫理との関係を考察するには、ソクラテスの「徳は知であり、学ばれうる」という命題にまでさかのぼることが必要である。ギリシア的世界における学問の理念とは、シェーラーによれば、「現実の含んでいる物(Dinge)を知ることが学問にとって第一の課題であり、これに対して、諸物の関係を確定することは第二の補足的な課題」(I.S. 364)である。先ず第一に物が認識されねばならず、その次にはじめて、ひとは物が相互にいかに関連しあっているのかということを開くことができるのであるという考え方は、物のみが直観的、概念的に模写され(abbilden)うる、すなわち認識されうるという考え方がその基盤にあることを示すものであり、その点について、シェーラーは述べているのである。したがって、ギリシア的世界においては、「知性的価値(die intellektuellen Werte)が現存在(Dasein)一般の根本価値となるのであり、それはすなわち、理性の倫理的・宗教的・美的諸機能もまた、認識する精神から独立している世界が認識すなわち模写されるところの基準に依存させる」(I.S. 366)ことになるのである。人間の倫理的課題は、自然の秩序、宇宙の秩序によって拘束且つ制限されることになり、そこにおいては、論理と倫理、あるいは真と善の質的な差異の存在しない合理主義的倫理学が成立することになると考えられる。プラトンにとって善は真理の一部分であり⁶⁾、「最高のアイデアとしての善は、認識の客

体であり、しかも人間の倫理性 (Sittlichkeit) の高低はそのような善のアイデアを認識する度合いに依存すること」(I.S. 18)なのである。ギリシア世界以来の流れを引く主知主義は、ストア学派の人々において、真理と善との同一視を招き、人間の意欲や感情の世界、あるいは生き生きとした生の領域が、認識欲求の精神によって片づけられることとなるのである。

こうして、ギリシア以来の主知主義から生ずる合理的主義的倫理学が、シェーラーによって、哲学史の流れの中から、先ず一つの、論理と倫理の関係のあり方として取り出されるのである。

次に、ローマ世界へキリスト教が移入することにより、論理と倫理の関係のもう一つのあり方、すなわち、二重の理性の立場、二重真理の立場が、哲学史の中から浮かび上がってくる。

キリスト教においては、「私は真理であり、生命である」⁷⁾という言葉から明らかなように、キリスト自身において、思考と意欲、真と善とが、対立することなく統一的、総合的に実現されている。シェーラーによれば、「イエスの精神こそは、新しい世界観の基礎」(I.S. 367)となりうるものであったが、イエスの福音の精神が、ギリシアの主知主義およびローマ帝政と結合することによって歴史的勢力となりえた代償に、イエス本来の精神は、本来それと対立すべき立場にあるギリシア的主知主義の精神の代表者、アリストテレスの哲学と「見かけ」の上で和解させようと試みたスコラ哲学により、「キリスト教の装いをしたギリシア的権威哲学」の方向に進むことを余儀なくされたのである⁸⁾。このことは、シェーラーによれば、「イエスの遺産の本当の悲劇」(I.S. 367)であった。

こうして、アリストテレス哲学において区別が立てられた「理論的理性(die theoretische Vernunft)」と「実践的理性(die praktische Vernunft)」との二つの概念が、スコラ哲学において、哲学的真理と神学的真理、あるいは理論的真理と実践的真理という「二重真理」の教説(die Lehre von den zwei Wahrheiten)へと形成され、これが近代哲学にも存続していったのである⁹⁾。シェーラーは、この二重真理の教説を、人間的理性と神的理性とが等しい強さで対抗し合っている状態、いわば両者の対抗の最頂点としてとらえている。アリストテレス的世界観とキリスト教的世界観との総合は、人間的理性と、神の存在を認識するための理性という意味での神の本質的意志としての理性との対立をもたらし、道徳的命令が神から出されているのか、それとも理性から出されているのか、という二者択一を我々に要求することとなったのである。スコラ哲学は、こうして、ギリシア以来の主知主義の伝統を受けながらも、理論と実践の質差を重視する立場を内に含みつつ、近代哲学へと連なっているといえるのである。

シェーラーが哲学史の流れから取り出した論理と倫理との関係づけの理論は、以上のようになり、大きく分けて合理主義的倫理学の立場と二重真理説の立場の二つである。しかしながら、これらの理論は、シェーラーにとっては、論理と倫理の統一的原理としては承認し兼ねるものであった。彼が、その学位論文において、合理主義的倫理学の立場を放棄し、また二重真理説の立場の可能性を認めていない¹⁰⁾ ことから明らかなことである。シェーラーは、これらの立場を克服して、独自の総合理論を打ちたてようとしたのであり、独自の立場を哲学史の中に位置づけようと試みたのであった。この二つの立場を批判・克服するという形で、シェーラーが実現しようとした独自の立場とはいかなるものであるのか、しかもそもそも、シェーラーは、これら、哲学史の中で大きな位置を占める理論を、いかにして克服しようとしたのであろうか。

この点について論ずるには、何よりも先ず、シェーラーに与えたカント哲学の大きな影響を見逃がすことができないと考えられるのである。

2. カント

カント哲学は、シェーラーの実質的価値倫理学において、形式主義として批判的に評価されているが、初期のシェーラー哲学においては、好意的且つ積極的な評価を与えられている。シェーラーがカント哲学から完全に離脱するのは、フッサールと出会い、フッサールの現象学的方法を獲得したあとであり、それ以前は、シェーラーにとってカント哲学の解釈は自己の哲学を形成していくうえで、重要な役目を果していたと考えられる。それは、先に述べた、理論と実践の統一的原理に関する二つの立場を克服するために、カント哲学が大きな役割を果しているからである¹¹⁾。

シェーラーによれば、ギリシア以来、決定的な解決をみないままに現代哲学に持ち込まれている、論理と倫理の関り方に、新しくかつ独創的な総合を見出した哲学者が、カントであった。シェーラーは、カント没後百年記念論文として、1904年に「カントと近代文化」¹²⁾ という論文を発表しているが、そこで、ギリシア以来のヨーロッパ思想史におけるカントの位置づけを行なうことにより、独自の思想史観を展開している。それによると、いわゆる近代的学問の精神を自覚し、伝統的なギリシア的学問理念にコペルニクスの転回を与えたのがカントであり、その点にカントの偉大さがあるとして、シェーラーは次のようにカント哲学を高く評価している。すなわち、「イマヌエル・カントは新しい哲学を、歴史的に現存する哲学に付加したのではなく、哲学の概念を基礎的に変更した」(I.S. 354) と。

カントの自覚した近代的学問の精神 (der Geist der modernen Wissenschaft) とは、すなわち、シェーラーによれば「近代科学の精神」のことである¹³⁾。ギリシア的理念において、

認識とはテオリア (theōriā) であり、対象に働きかけるのではなく、「対象の前で停止して対象を直観する (anschauen)」 (I.S. 359) こと、すなわち、対象を模写することである。しかも、その対象はすでに「与えられたもの」として、自然、あるいは宇宙の中に秩序づけられていることが前提となっている。このような意味において、ギリシア的学問は、模写的、観相的学問 (die abbildende kontemplative Wissenschaft) であるということが出来るであろう。前述したように、そこでは、認識することが第一義的な問題であり、対象間の「関係」確定は、それが模写できないが故に、二次的 (補足的) なものにすぎないのである。

一方、このようなギリシア的学問に対抗する流れが、すでに三百年前に存在していた。それは、ガリレイ以来の学問の流れであり、「与えられている」自然を認識するのではなく、逆に自然の法則的關係を探究するという、対象に対して能動的な態度をとる認識のあり方である。カントは、この近代の自然研究における能動的な実験精神を把握して自己の哲学体系に取り入れることにより、ギリシア以来の模写説を克服したのである。シェーラーによれば、『『どんな物もなく、ただ関係 (Beziehung) のみがあるところには、主観的な恣意 (die subjektive Willkür) がある』とギリシア人は考えるが、『法則的關係のあるところ、ただそこにのみ必然性 (Notwendigkeit) と客観性 (Objektivität) があり、物 (Dinge) と動作 (Agenzien) が問題点であるところでは、いずれにおいても多少の差はあれ個人的な恣意がある』と近代人は考える』 (I.S. 365) のである。

シェーラーにとって近代的学問は、ギリシア的学問が「模写的」学問 (die abbildende Wissenschaft) であるのに対して、「形象的」「創造的」な学問 (die bildende schöpferische Wissenschaft) であるということが出来るであろう。「模写」あるいは「観相」という態度を取るギリシアの主知主義を克服することによって、倫理的課題を合理的立場からとらえる一元論的な、いわば内へと閉ざされた状況から、倫理的実践の問題が解放されたのである。先ずこの点に、シェーラーは、カントの偉大さを見出している。

法則的關係を探究するという近代科学の精神を自己の学問的理念としたカントにとって、「自然 (Natur)」とは、「理性から独立して存在する物の秩序ではなく、…悟性の創造物 (die Schöpfung des Verstandes)」 (I.S. 366) である。自然界の法則や關係を探究するとき、それらは所与 (die Gegebenheit) としてすでに与えられているのではなく、理性の活動の中で形成されるのであるが、シェーラーは、カント哲学において、この「自然の実在性 (die Realität der Natur) は精神の法則 (das Gesetz des Geistes) に基づいている」 (I.S. 365) という点、すなわち、自然に対する精神の優越という点を、特に強調していると考えられる。それは、シェーラーがキリスト教とカントとの関り方を論ずることにおい

て、より一層強調されるのである。

シェーラーによれば、「イエス以後に生まれたすべての思想家のうちで、最初に福音書の根本理念と…自然の近代的研究の事実との内面的・論理的調停をなしとげた」(I. S. 368) 思想家として、カントが挙げられている。カントこそは、「はじめて教条主義的に拘束された思惟という意味ではなく、キリスト教の根本理念に適合した世界把握(Weltauffassung) という意味での『キリスト教的哲学』(die christliche Philosophie)」(I.S. 368) を確立した哲学者であると、シェーラーは彼を全面的に高く評価するのである。カントが「自然秩序」(Naturordnung) から人間の理性を解放し、人間の精神活動に無限の創造性を与えたことは、シェーラーにとって、精神的人格(die geistige Person) が自然に絶対的に卓越していることの基礎づけを意味するものであり、その内部において真と善とが調和的に統一されているところのイエスの教えを実現する可能性を示しているといえることができると考えられる。シェーラーによれば、「カントの学説によってはじめて、…外なる宇宙(Kosmos) と内なる衝動体系(Triebsystem) としての自然、換言すれば、『人間的自然』(die menschliche Natur) によって制限されていない無限の倫理的課題が成立するのであり、…『われらの内にあり、この世のものではない神の国』¹⁴⁾ という言葉が哲学的に証言される」(I.S. 369) のである。シェーラーのこの言は、カント哲学を、「キリスト教的哲学の基礎づけをなすもの」として解釈する彼の思想的態度を、明瞭に言い表わしているものと考えられるであろう¹⁵⁾。

シェーラーのこのようなカント解釈は、シェーラーがすでにこの時期において、キリスト教的哲学を志向しているということをも示していると考えられるであろう。

カントにおいて、それまで自然の秩序の中でのみ存在した倫理的要求がその限界を超越したものと把握され、それに伴って人格精神の自由が明示されることによって¹⁶⁾、真が善の上位に位置するのか、それとも善が真の上位に位置するのか、といった二つの異質な理性能力を仮定する「二重真理」の立場は克服された、とシェーラーはみなしたのである。私自身に与えられた感覚の複合体を自然の理論的認識の誘因とするのか、それとも、倫理的目的定立の誘因とするのか、その判断は、私自身の自由な判断にまかされている。私自身がいずれかを決意しない限り、世界状態はまだ未定なのである。そして、そのいずれを決意するかによって、私の精神の働き、すなわち、理性の作用の方向が決定されるのである。カントにとって「理性はつねに同一である (Die Vernunft ist immer ein und dieselbe.)」(I.S. 57) ということは疑いえないことであるとするシェーラーのカント解釈にあっては、カントの説く理論理性と実践理性とは、決して二つの相異なる精神的能力ではなく、従って、両者は二重真理説のように対立するものでは決してないのである。理論的世界と倫理

的世界とは二つの独立した対立的勢力ではなく、私という主観の態度の二つの方向性にはかならないのであり、この二つの方向性の秩序は理性作用によってのみ存在し、しかもそれによってたえず支えられているのである、ということが、シェーラーのカント解釈の結論でもあるのである。

カント哲学をその拠り所として、ギリシア以来の合理主義的倫理学や、中世哲学における二重真理説を克服したシェーラーにとって、カントの存在は非常に大きなものであったと言わねばならない。しかしながら、カント解釈の結論として、理性には理論理性と実践理性という二つの相異なる方向性が存在してはいるが、それは、同時にではなく、あれかこれかという形で、場合に応じておのおの的作用を果すものであり、理性そのものとしては、そこに同一性を見出しうるとしたシェーラーが、カント哲学におけるこの理性という概念を、彼の求める論理と倫理の総合的原理として受け入れていると認められる記述は、論文のどこにも見出されないのである。確かにシェーラーにとって、カントは、論理と倫理、真なるものと善なるものとの総合を独創的な方法によって見出そうとした哲学者であった。しかし、カント哲学における理性という概念は、シェーラーに自己の哲学的問題解決への示唆を与えてくれるものではあるが、それがそのまま、シェーラーの探求している論理と倫理の統一的総合原理とするには、まだシェーラーに十分な満足を与えなかったのではないかと考えられるのである。

その理由の一つとして、このようなシェーラーの態度には、その師であるルドルフ・オイケンから受けた影響が強く作用しているということが挙げられよう。オイケンにより、アウグウチヌスやパスカルの偉大さを知らされ、精神の哲学を学んだシェーラーは、前述したようにすでに初期の論文において、カントの学説に託して自己のキリスト教的哲学への志向を示している。これはすなわち、精神作用といっても、いわゆる理性の作用だけではなく、理性をも含む、もっと幅広く豊かな内容を有するところの精神の哲学、オイケンの言葉によれば、精神優位の学説に、シェーラーが向かっていたことを示すものであろう¹⁷⁾。従って、シェーラーにとっては、論理的世界と、生き生きとした生と強く関りのある倫理的世界との総合的原理を、理性という作用のみで解決することには大きなためらいがあったのではなかったかと考えられるのである。

では、シェーラー自身、自己の哲学をいかなる方向へ進めようとしていたのであろうか。精神優位の説を貫きながら、論理と倫理、両者の総合原理を見出す拠り所を、どこに求めたのであろうか。ここにおいて新たに、人間の感情生活という側面が見出されてくるのである。

3. 情緒主義的倫理学への道

シェーラーは、ギリシア以来の思想史の中でイギリスの道徳哲学を高く評価している。そこにおいて「道徳感覚」(der moralische Sinn)という新たな概念の形成がみられるからである。なかでも、シェーラーは、「真と善という対立する関心をきわめて巧妙にある種の統一へと導く立場」(I.S. 43)として、ハチソンの道徳感情論をきわめて重視している。このハチソンの学説は、シェーラーの後の著作の中で展開されていくところの感情倫理学、換言すれば情緒主義的倫理学の端緒をなすものとしても重要であると考えられる。

シェーラーによれば、ハチソンが、「あらゆる他の単なる快感情 (das Gefühl der Lust) から厳密に区別される倫理的感情の直接性 (Unmittelbarkeit)」(I.S. 43)を示したことにより、彼の抱えていた問題に新局面がもたらされることとなった。すなわち、合理主義的倫理学の立場とは異なり、ハチソンによって、「善はもはや真理ではなく、真理もまた善の一部ではない」(I.S. 43)ことが明らかになったのである。「善とは、あらゆる人間に生得的に与えられており、思惟によっても、単なる受動的な同情(Sympathie)によっても産み出されえないところの、あの道徳感覚の帰結なのであり」(I.S. 43)、シェーラーは、このようなハチソンの学説から、道徳感覚を、「思惟とならび、規範を与える力として、意識のうちから強く取り出されるもの」(I.S. 43)と解釈したのである。ここにおいてシェーラーは、「真理概念と価値概念とが、明晰・判明に分離されるに至った」(I.S. 45)と考えるのである。

「思惟と意欲、知ることと行為すること、真と善との間には、われわれの考えによれば、超え難い溝が存している」(I.S. 11)として、論理学と倫理学との領域は一致融合するものではないということに早くから注目していたシェーラーにとって、ハチソンの道徳感情論は、自己の哲学の進むべき道の大きな道標になったと考えられるのである。

シェーラーはトマスの教説について次のように批判している。「いかにして合理化されえぬものを合理化するかということがまさに問題である、というトマスの基本的な考え方を理解しはする。すべてが、倫理的行為もが、合理化されねばならない。いわばそれは公理的前提となっている。そして、合理的な世界体系を、それが人間的行為そのものを破壊するかに見えるにもかかわらず、人為的に完結させるのである。」(I.S. 32)と。シェーラーの立場が、この批判において逆説の形をとってよく描かれている。シェーラーはトマスと異なり、合理化されえぬものは合理化しない。すなわち、非合理的なものとしてそのまま定立する道を選んだのであった。理論的証明(すなわち、真なるものの世界)は、理性に起因するが、道徳的領域は感情の領域に含まれる。感情は「精神」における「非合理的なもの」

であり、従って、感情の領域を合理的な原理に還元しようとする考え方にそもそも無理があると、シェーラーは考えたのである。

善なるものは感情の領域における対象であり、感情の領域を統一する原理は、理性ではなく、「心情」(Seele)である。この立場が、シェーラーの哲学の出発点であり、後年、彼の思想を展開させていく基盤になったと言っても過言ではないと考えられるのである。

結 び

シェーラーは、論理と倫理の統一原理を求めてその思索活動を開始したが、初期の論文においては、その統一原理は特に明確に提示されていない。しかしながら、初期の哲学においては、オイケンの影響をかなり強く受けているということもあって、シェーラーは、オイケンの説いた「精神生活」(Geistesleben)という概念をその統一原理とみなしていたという考え方も可能である。シェーラーによれば、オイケンはカントにおける「理性」という概念の代わりに、単に論理的ではないという意味で「精神」という表現を使用していると考えられる。論理的作業は、精神的内容の一部にすぎず、道徳的实践をはじめ文化活動のあらゆる領域が精神的内容に含まれるのであり、従って、論理も倫理も精神生活において統一的に基礎づけられている、とするのが、オイケンの「精神生活」という概念に対するシェーラーの解釈である¹⁸⁾。そして、この解釈をそのまま、初期のシェーラー哲学における、論理と倫理の統一的な原理と考えることもできる。シェーラーは、オイケンの精神優位の学説に強い影響を受けており、その学説が彼の全哲学を貫いているということもできであろうから、少なくとも初期のシェーラーにとっては、オイケンの「精神生活」という概念は論理と倫理の根源に潜む最高原理であったといえることができるかもしれない。しかしながら、論理を理性の立場から、倫理を情緒の立場からとらえることをその哲学の出発点としたシェーラーにとって、両者の溝はあまりにも深すぎるものであるといわねばならないであろう。

真と善とを心情において統一しようとする試みは多くの側面からなされているが、そこには、総合あるいは統一という言葉よりも、対立の面の方が強くあらわれるのである。理論的には事実をありのままに語ることが真理であるが、倫理的にそれは必ずしも善であるということとはできない¹⁹⁾。すべてをありのままに語ることが必ずしも善であるとは言えないという事実は、我々の日常生活においても無数に見受けられることである。たとえ、オイケンの精神生活の概念を統一原理としたにしても、このような対立が、真と善の間には常に潜んでいるのである。そして、初期哲学におけるシェーラーが、独自の明確な統一原理を自ら打ち出すことのできなかつた大きな理由は、まさにこの点にあると考えられるの

である。

初期シェーラー哲学において、若きシェーラーは、論理と倫理、真なるものと善なるものとの関わり方を中心問題としつつ、カントやオイケンの影響を受けながら、キリスト教的哲学への道、および情緒主義的倫理学への道を進もうとする姿勢を打ち出している。この姿勢は、シェーラーの思索がフッサールとの出会い以後、実質的価値倫理学として展開していくうえでの重要な基盤となるものであるということができよう。しかしながら、論理と倫理との対立という問題は、以後も形を変えて、シェーラー哲学の中に現われてきている。その意味において、初期のシェーラー哲学にあってすでに、以後展開されていく彼の哲学の中でも最も根源的でしかも大きな緊張をはらんでいる問題点が提示されていると考えられるのである。

注

- 1) Max Scheler, Gesammelte Werke (FRANCKE) 第 I 巻 S. 11~160 の部分。
- 2) Max Scheler, Gesammelte Werke (FRANCKE) 第 I 巻 S. 354~370 の部分。
- 3) I は巻数, S. 13 は頁数。以下シェーラーの著作からの引用はすべてこれに準じ、本文中に記す。
- 4) 小倉志祥「シェーラー哲学の出発点」(理想 第 493 号 1974 年所収) p. 2 参照。
- 5) 同上。
- 6) Vgl. I. S. 24
- 7) ヨハネによる福音書 第 14 章 第 6 節
- 8) Vgl. I. S. 367~368
- 9) Vgl. I. S. 28
- 10) Vgl. I. S. 60
- 11) J. R. Staude, "Max Scheler", (New York 1967) 参照。
- 12) 注 2) 参照。
- 13) 小倉志祥「シェーラー哲学の出発点」p. 10 参照。
- 14) ルカによる福音書 第 17 章 21 節
ヨハネによる福音書 第 18 章 36 節
- 15) 小倉志祥「シェーラー哲学の出発点」p. 12 参照
- 16) Vgl. I. S. 368~369
- 17) 小倉貞秀「マックス・シェーラー」(塙書房 塙新書 26) 参照。
- 18) Vgl. "Kultur und Religion" (Max Scheler, Gesammelte Werke, BAND I, Francke)
- 19) Vgl. I. S. 136-137, 158-159

尚、テキストの訳出にあたっては、シェーラー著作集 14 (白水社 五十嵐靖彦他訳) を参考にした。

上記以外の参考文献

Die deutsche Philosophie der Gegenwart (Max Scheler, Gesammelte Werke, Band 8. Francke)
R. Eucken, Die Lebensanschauungen der grossen Denker, (Berlin 1950)
小倉志祥「カントの倫理思想」(東京大学出版会)
高坂正顕「カント」(理想社)

付 記

本稿は、第16回東北教育哲学教育史学会において口頭発表したものを加筆・訂正したものである。